

## 国際円座「近世身分社会の比較史」

'International Roundtable' (ENZA) "Comparative History of Early Modern Status Society"

2009年7月18日(土)19日(日)の両日、大阪市立大学高原記念館学友ホールを会場とし、「近世身分社会の比較史」をテーマに「国際円座」が開催された(G-COE都市論ユニット、大阪市立大学文学研究科重点研究、近世大坂研究会、ぐるーぷ・とらっど3共催)。近年、日本における身分的周縁研究の進展により、社会集団の具体的な実態や集団相互の関係構造の解明が深化しつつある。こうした細部・深部から全体を見据える視座はフランス史などにおいて蓄積されつつある。くわえて、英語圏の日本史研究の一部で行われている近代化・帝国主義化論を捉え直す視座は、日本史研究そのものを見つめ直すことを要請している。そこで本円座では、日本の身分社会について、中国、朝鮮社会、インド社会などを参照とし、国際的な視座も含め比較史的に議論することを狙って開催した。「円座」という聞き慣れない形式は、巷のシンポジウムとは一線を画し、司会・報告者・パネリスト間で実のある討論を行い、それを通じて新たな研究方法を共同で発見・構築することを狙って設定した。両日を通じた参加者は国内外の研究者50人にのぼり、会場はほぼ満席となった。

司会は森下徹氏(山口大学教授)が務めた。初日は事例報告が7本行われた。まず塚田孝(文学研究科教授)が問題提起報告として、19世紀大坂の非人集団について垣外仲間の弟子層の実態を紹介した。つづいて井上徹(文学研究科教授)は、明代末の都市広州を対象に、経済格差の拡大による都市行政制度の変容のなかで、地域支配者としての郷紳や無頼が下層民衆にとっていかなる存在であったのかを論じた。マーレン・エーラス氏(プリンストン大学院生)は、越前大野藩による乞食・浮浪者に対する救済が、非人集団の御用に依存することで実現されていたことなどを指摘した。三田智子(G-COE特別研究員)は、竹皮問屋・仲買・雪駄商人や雪駄表を生産する小前層ら相互の関係と展開について、19世紀泉州南王子村の村落構造のなかに位置づけた。竹ノ内雅人氏(飯田市歴史研究所)は、江戸の下層宗教者集団の実態について移住政策前後のあり様を把握した。及川将基氏(立教大学院生)は捕鯨を行う鯨組組織の実態を、周辺村々や領主権力、市場などを絡めた社会総体のなかで捉えることを試みた。中谷惣(G-COE特別研究員)は、トスカーナの都市ルッカに残された14世紀前半の民事裁判記録に検討を加え、法的「貧民」カテゴリーと実体としての貧民とのズレを指摘した。

二日目は、総合討論にむけた問題提起として中国・朝鮮・インド・日本史研究の立場からコメントが行われた。岸本美緒氏(お茶の水女子大学)は、身分的周縁論が目指す方向性について質疑を加え、流動的な社会である中国明・清期と社会集団を基盤とする日本とは身分のあり方が異なっていること、人々の事実上の社会関係から身分制度を考えるアプローチの重要性を述べた。デビット・ハウエル氏(プリンストン大学)は、近世朝鮮では法的には奴隷として位置づけられる存在が、生活・労働の局

面では「自由」な場合があったのに対し、日本近世村落では法的に百姓でありながら隷属する被官を比較し、都市だけでなく村落も含めた身分社会の比較が必要であると指摘した。ダニエル・ボツマン氏(ノースカロライナ大学)は、英国のインド植民地支配の拠点都市が近世城下町と近似的な様相を見せること、本来「ゆるやかな」インドのカースト制度が英国の植民地支配によって硬直するという見方を紹介し、身分社会を比較する際に植民地主義との関係を考慮すべきことを指摘した。吉田伸之氏(東京大学)は、大山喬平氏(立命館大学COE推進機構教授:日本中世史)が「ゆるやかなカースト社会」として論じた労働の歴史的・儀礼的価値の相違の指摘を評価する一方、所有論、とくに「生きた労働力能」の所有形態からの整理が必要であると指摘し、身分社会を比較史的に把握するうえでの視座を述べた。

午後は、大山氏・鈴木良氏(元立命館大学教授:日本近代史)が加わり、「円座」を組んで討論を行った。各報告や討論の内容は近く刊行される予定であり詳細はそれを参照されたい。二日間の限られた短い時間ではあったが、国内外の、時代の枠組みを越えた研究者が一同に会し、しかも精緻な個別実証研究報告とそれぞれの視座に基づいた身分社会論に関する討論は、今後「身分社会の比較史」の構築へ向かう重要な出発点になった。

■山下聡一(G-COE特別研究員)



「円座」による討論

On July 18 and 19 (Sat. and Sun.) 2009 an 'International Roundtable' (ENZA) on the topic of "Comparative History of Early Modern Status Society" was held at the Friendship Hall of Osaka City University's Takahara Commemorative Hall. Discussions were held on early modern Japan's status society, with comparisons drawn to Chinese, Korean, and Indian societies. The unfamiliar format of the ENZA roundtable, an arena symposium, was contrived, delineating a single line, with the intention of having substantive debate between the presenters and panelists and having them construct together new research methods. As many as 50 researchers from both Japan and abroad participated, and the meeting hall was filled to capacity. The researchers, transcending the boundaries of historical period, all met together, and the detailed individual testimonies in the research reports, and the Status Society Theory that were based on their viewpoints, formed an important point of departure towards constructing a 'comparative history of status societies'.